

ことが著者のトマス解釈の特徴となっていることを指摘することで充分であろう。そして、ここでも著者による徹底したトマス解釈がトマス思想を一定の方向へと発展させる結果を生じていることを繰返し指摘しておきたい。

最初にのべたように、本書はアウグスティヌスからクザーヌスにいたる中世思想の流れについて信頼度の高い概観を提供すると同時に、個々の重要な思想家が特定の問題に関して行った探求と思索についてきわめて精密な理解と解釈を提示しており、研究者にとっても知的な刺激に満ちている。これらのことから、本書が今後長い期間、わが国における中世思想研究の基本文献としての位置を占めることは確実であると思われる。

最後に、著者が完璧な日本語で講義し、学会活動に参加する姿を見慣れている同僚として、本書が「翻訳書」として出版されていることはむしろ奇異に感じられる。本書の諸論文が当初ドイツ語およびその他の現代ヨーロッパ語で書かれたものであることは事実であり、翻訳者たちの労苦にたいしても大いに感謝するが、著者が日本語で自らの哲学的探求と思索とを表現しようと試みていることは、そう言ってよければそれ自体きわめて興味深い、一つの哲学的実験であると思う。われわれ日本人が西洋の古典語や現代語のテキストと取り組みながら進めている仕事が欧米の哲学研究にたいしてどのような寄与となりうるのかも問題であるが、著者の論文を翻訳としてではなく、日本語で書かれた論文として読むとき、多くの思いがけない重要な発見が可能であるように思う。しかし、そのことに立入るのはこの書評にとっての課題から逸脱することであろう。

真方敬道著『中世個体論研究』

キリスト教歴史双書3，南窓社，1988年，276頁

渡 部 菊 郎

「個」の問題は思想史の十字架である。

東北大学名誉教授真方敬道氏が昭和62年6月急逝された後、ご遺族の方のご協力のもと門下の皆様のご尽力によって2冊の遺稿集が編集された（編集者：小野忠信・山村敬・石渡隆司氏）。信仰的な動機の強い論文や随想、講演などは「異教文化とキリスト教の間」（南窓社・昭和63年）に、昭和37年東北大学文学部に提出された学位論文「西洋中世哲学における個体論の研究—その序論的研究—」を中心に個体論もしくは中世哲学と密接な関係にある論文が、本書「中世個体論研究」に編纂された。「編者まえがき」にあるように「個体論は著者の生涯を通しての主要な研究テーマであり、救済や復活の思想を基礎づける個霊の存立の根拠としてご自身のキリスト教信仰と深く係わるものであると同時に、西欧思想全体を俯瞰するための視座でもあった」。著者は晩年にいたってご自身の専攻を「西洋中世盛晩期哲学とドイツ宗教改革神学との連続面の研究」と規定されたが、本書はルターやパスカルへの関心によって触発された個体の問題を、古代から中世晩期にかけての西欧思想の中で丹念に跡付け、近世の意志主体としての人格・個体尊重へと移行する個体論の歴史に、形相性を個体化の原理として立てることによって飛躍をもたらしたドゥッス・スコトゥスの個体論に迫ろうとしたものである。

本書は三部から構成されている。第一部の「中世個体論研究序説」は上述の博士論文の主文である。第二部は「個体論研究 補遺」と題され、博士論文に付説として加えられた「アリストテレスにおける種と個体」を第一章として、その後にかかれた「古代哲学における『不可分なるエイドス』」（第二章）「個と個物と個体」（第三章）および「小論の根本意図」よりなる。第三部「個体論の周辺」は、直接個体を主題的に論じたものではないが個体論と関係の深い論文「西洋中世における神観念」「世界の偶然性について」「主意主義について」の三篇よりなる。論考の全体は旧約・新約の聖書学的研究、古代ギリシャ思想特にアリストテレスのテキスト解釈、アラビア思想の展開、そして個々の中世思想家の発展史的研究や、近代思想への展望など広範な視野からの多岐にわたる論述であり、全体を評することは評者の力に余る。ここでは主要部分の「個体論」を中心に紹介してゆくことにする。

第一部ではまず「古代思想にあらわれた個体観」（第一章）で個体論の見地から旧約とギリシャの人間観を詳細にたどり、新約と初代教父における人間論を捉え直す。旧約聖書にはギリシャや近世の体にあたる語がない。ヤハヴェは魂一体未分の人を作ったのである。霊・魂・肉は人間の要素ではなく、全人の様相である。しかしその全人

の核心はむしろ身体にあり個的である。他方「ギリシャの二元論」では、中心が魂の側にあることは疑えないが、個霊よりは全霊が現実の基礎をなしていることを示す。プラトンの靈魂論において体は「魂としての人」に使用される。アリストテレスは魂と体とで人であり、個性性は体からくるとする。そこでは魂もウシアであるといわれているが、ウシアは個体でも普遍でもある。アリストテレスの個体論は形相ないし種の理論の副産物にすぎず、魂もやはりまだ十分には個体化していなかったと著者は論ずる。（この問題は補論第一章「アリストテレスにおける種と個体」でテキストの発展史的解釈を踏まえさらに詳論される）。「新訳における『われ』と体」では、パウロのわれ=体は旧約の全人観を保ちながらギリシャの「体」の近くで捉えられていたことを示す。身体復活論は旧約的な全人われの中核を身体におかなければ理解されない。そこからさらに著者は、キリスト教がオリゲネスにおいて初めて精神主義に転じたこと、しかしアウグスティヌスの総体観にはプラトニズムとともに旧約の個人思想も生きていることを論じてゆく。「アヴィセンナにおける個体と存在」（第二章）アリストテレスはウシアの二義性を残した。アル・ファーラービーがアリストテレス哲学により旧約の創造信仰を解釈した際の世界の偶然性すなわち被造物における「本質と存在の事象的区別」は形而上学史上の画期的発見であった。『珠玉の知恵』では、個在や存在を本質から区別し、それらを実体に近づけて人間が実体になるとき存在と個在はそこから流れでるとされる。個在や存在が実体に属しながら本質に属さず、本質と実体は区別された。彼の「偶然存在」はアヴィセンナのあらゆる附帯性に対して無差別な「不定な本質」に厳密化された。アヴィセンナは本質を個の本質と不定な本質に分け後者によって一と多を仲介しようとした。しかし不定な本質によって個体の可能性を開いたものの、その個体観はプラトニズムやアリストテレスの実体に戻りがちであった。また存在はほぼ実体的に考えられていて、本質と存在の事象的な区別といっても結局は本質が実体と区別されたに過ぎなかった。「トマス・アキナスの個物論」（第三章）ではトマス・アキナスにおいては逆に存在概念が優先し個体論はいわばその応用であったことを示す。まずトマスの個物論がギリシャ・アラビア哲学とキリスト教思想との交錯の中で形成される過程を、まず『ボエティウス三位一体論考』により確かめる。個物化の根原は質料でも、形相でもなく、複合体の含む「この形相とこの質料」の中にある。質料が個別化されて「この質料」になるのは空間的な拡がりとしての量による。それは他と区別される個別化の根原であり、個体の不可分性の根原で

もあるが、指示された質料のになう拡がりは、量的に変化する個物の同一性を説明するため測定に限界をつけない不定な拡がりであった。次に、「この」と「拡がり」と「不定」の哲学的背景と神学（三位一体論と靈魂の個性の問題）との関わりを考察し、不定な拡がりから拡がりへのトマスの強調点の移行と含み持つ問題点を示す。実体形相は事物を「まさにこの存在するもの」とし「質料に端的に存在を与える」から、一つの個体に一つあるだけでよい。実体形相唯一説が「不定な拡がり」説を捨てさせた。個体化の根原としての拡がりをもつばら物体の付随性となり不定でなくなるにつれて、個物性の一は数的になる。そうすると質料による数的個性と存在に伴う超越的個性が区別され、そこで物体における二通りの個性の関係が問題となる。また個人の魂はどうか。そこで付説「トマス・アクィナスの天使論について」で著者は非質料の実体を主題としてトマスの個体論の残す問題性を指摘し、三位一体論的命題の論理構造の分析から個体論を展開したスコトゥスはその欠陥を一掃し、形相の側から個体化をとらえたと論究する。ジルソンもいうように個体論はスコトゥスにおいて最も熟思された主題の一つである。スコトゥスは質料、延長量、存在等を個体化の原理とする既存のあるいは可能なあらゆる個体観を批判して、「形相の本質の究極現勢として個性」という説を立てる。その際スコトゥスはアリストテレスやアヴィセンナに依拠し、トマスの「存在現勢」説を個体論に適用したにすぎないが、個性を質料から形相の側に移したところに個体の意義や見方についての重大な転機がある。ここに個性は質料的・欠損的なものから完全性を持つ積極的なものに転化し、やがて個体は意志主体としての人格に変貌されて、近世の個体尊重へと移行してゆく。スコトゥスは形相と形相性とのやや煩瑣な区別をつけ、個体差は形相性によるものとしてそれと種差とを区別し、そこに個的な意志と神の意志・種の普遍とを調停して主意主義の立場から主知主義を包み込もうとしたのである。さらにスコトゥスの個体主義は唯名論を介して宗教改革思想に連なること、反宗教改革のスアレス学派がスコトゥスとトマスの中間をゆく個体主義的實在論であったこと等が論じられる。

なお、第二部の「古代哲学における『不可分なるエイドス』について」では、スコトゥスの個体論の源泉をピタゴラス派、アトミスト達の「不可分者」、プラトンの「不可分なるエイドス」に求め、これらの概念が、中世哲学へ流れてゆく論理のおよび思想的連関を明らかにする。「個と個物と個体」ではトマスの個体論と、スコトゥスの個体論を比較して論じている。第三部「個体論の周辺」は、スコトゥスにおいて重視

された神の個性性の表現としての自由をノミナリズムの形で強調したオッカムを論じ、クザーヌス、ルター、スアレス等の神観念が中世の遺産を後代へ仲介したことを略述する「西洋中世における神観念」、トマスの神の存在証明における偶然と必然を追求し、アリストテレスにおける可能と偶然を『命題論』で整理し、スコトゥスにおける超現的偶然性の意味を述べる「世界の偶然性について」、トマスに対しその本性的欲求の対象たる浄福に対しても自由を持つとするスコトゥスの意志論をギリシャ哲学、グノーシス思想の自由論、パウロやヨハネの人間観に内蔵されていた意志論、アウグスティヌスの意志論から考察し、そこに真の意味での主意主義の再生を見る「主意主義について」の三編からなる。

以上が簡単なが本書の主旨である。ヘブライ的伝統と古代ギリシャ思想の流れ、さらにアラビアでの思想的展開をも射程にいれた上近代への視界も含めた広範な思想史的考察は圧巻である。個々の思想家における問題の取扱いだけでも難解なものをこれだけの歴史的視野から捉えようとする著者の試みにまず敬意を表したい。ただ難を言えば第一部を除くと別々の機会にかかれた諸論文をまとめたものであるため、あるものは緻密な文献学的考察、あるものは将来の研究への展望を開く覚書のようなものになっており、また視点の変化も見られ統一的に捉えにくいところはある。さらにトマス・スコトゥス・オッカムそして近代への流れにやや安易な図式的解釈がみられ評者としては首肯出来ないところも散見される。しかし「異教文化とキリスト教の間」と併読すれば、広範な思想史の森の中を歩む著者を導き支えているものが信仰に基づく内省から湧きでた深い問題意識であり、研究の進展とともに深まってゆく著者の視点の軌跡が推察される。問題をこれだけの歴史的文脈に広げたのであればさらに詳細な研究が期待されるが、逆に言うと「个体論」という一つの視点からまとめあげてゆくのは至難の業となったであろう。非才を省みずあえて異を唱えたのは、評者を含めわれわれ中世思想研究に携わるものが将来の課題の一つを強く受けとめたことを示したかったからである。感謝しつつ著者のご冥福を心よりお祈りするしだいである。